

火羅図の図像と成立

真 鍋 俊 照

わが国で平安時代に隆盛をきわめた北斗七星を祈る修法は、通常は『北斗七星護摩法』(一卷、以下、「A本」という)といふ後でふれる『梵天火羅九曜』(一卷、以下、「B本」という)とともに中国の一行(六八三—七二七)の撰述である。A本にはB本において図像化されている日天、月天、火天、水天、木曜星、金曜星、土曜星、羅睺星、計都の九曜の印言および九執曜天の総印言が説かれている。ここではこの梵天火羅図(略して火羅図という)の図像の原型と展開を追求しながら、その成立について述べたい。

いうまでもなく火羅図にかかわる北斗法は日本密教における修法の展開において、もつとも多く行われたものである。とくに延命・増益を求める過程で、天台・真言両宗でさえ呼称を変えた。すなわち真言宗の「北斗」は仁和寺であり、「妙見」は東寺であり、天台宗の「熾盛光」は山門であり、「尊星王」は三井である。このうち「妙見」と「尊星王」は数種の尊容をもち、「北斗」と「熾盛光」は壇図等をともなう。

B本の『梵天火羅九曜』は人間の生年の十二支に応じて北斗七星の一つをその人の本命星と定めることを説いている。そして九曜の真言およびこれを祭る方位や供物を述べる。また注意すべきは人の年齢に応じて当る星と吉凶を説いていることとA本には見られない九曜の図像が挿入されていることである。B本の名称をかかざると(1)「羅睺蝕神星」(大正、第二十一、四五九b)、(2)「中宮土宿星」(同、四五九c)、(3)「嚙北辰星」(同、四六〇a)、(4)「西方大白星」(同、四六〇b)、(5)「太陽密日星」(同、四六〇b)、(6)「南方火熒惑星」(同、四六〇c)、(7)「計都蝕神星」(同、四六一a)、(8)「暮大陰^{月天}」(同、四六一b)、(9)「東方歳星」(同、四六一b)である。これらの図像は、奈良において長谷寺所蔵の版図および版木の存在が最近になって確認されている。³⁾

この九曜は日・月・七星であるから平安時代末期に流布した星曼荼羅(法隆寺や久米田寺所蔵等)の中に十二宮や二十八宿とともに図像が描写されている。北斗七星の支配下にあつ

て、人間の運命を執持する意で九執ともいう。とくに唐開元六年(七一八)に訳された曇悉達(トモセツタ)の『九執曆』などは星占いの機能をかねていたと伝えるくらい実用性も高かった。

火羅図の図像を考える前に九曜の構想をみなければならぬ。星曼荼羅によると天尊釈迦如来の左右に配置されるのが日曜と月曜で、この二つの間に七曜(番号は既述のB本による)を描く。その連なりかたは、(4)太白(西)、(6)熒惑(南)、(7)計都(東南)、(2)鎮星(中央)、(1)羅睺(東北)、(9)歳星(東)、(3)辰星(北)の順である。このうち日曜と月曜は十二天の変形で、それぞれ方位は天尊の左(日天)、右(月天)である。ただし九曜の図像といっても必ずしも密教オリジナルな要素のみで構想が組み立てられているのではなく道教の理論も細部においては影響が大きい。このことと九曜の図像がほぼ晩唐頃の成立といわれている点を考慮するならば、一行以外の金剛智(六七一一七四一)および不空(七〇五一七七四)訳出の儀軌とも比較して考えなければならぬ。前者の『北斗七星念誦儀軌』は九曜にもふれており、所説は天尊が日月星宿のために八星呪を説くところから始まる。八星呪の印は、『金剛頂經』七星品に出ずとあり、八星そのものについては別伝に次のように述べる。「八星とは日藏經にも八曜という。彼に同なるか、其の名体を知らず。九曜の中、羅睺、計都とは元と一体なりとの説あり、爾らば彼の經もこの二星を合して八

曜というか。今の真言の初の颯戞(Shakata)は七の梵語なり。爾らば如何、若し妙見を加えたるか。次の軌と七曜尊星というが故に、或る説にいわく七星(曜か)と輔生とを八星という」。この伝承は性寂の『秘密儀軌隨聞記』第六に述べられており、また真常の『秘密儀軌傳授口決』にも引用されており、両者とも関連性がある。金剛智訳の『北斗七星念誦儀軌』の伝承は久安五年(一一四九)の宝寿院本によるが、『貞元録』第十四や同録の第二十九の入藏録に見えないので後世の偽作とする解釈もあるが、口決等は創作ではないと考えられる。とくに八星(八女)⁽³⁾の中には輔生を加えている点である。また七曜は「颯戞」(シャプタ)すなわちヴェーダにいうシャプタリシ(Saptarishi)「七人の聖者」に由来の原点を求めることができる。北斗七星のことを漢訳で輔星ともいう。しかしこれは武曲星付近の輔星の意であつて確実な星座の位置から、とりきめられたものではない。もとの名はアラビア名によるとエス・ハアアで陰陽道の太山府君にも該当する。以上のように九曜のうちの七曜は十二天の日天・月天と異なる像容として成立事情も違つて考えられる。まず図像の全容をみるため次の二本を比較しながら検討してみたい。資料はB本とC本(現図胎藏界曼荼羅の最外院)および図像のD本『九曜秘曆』である⁽³⁾。

(1)日曜像はC本では aditya び太陽・日精の意。右肘をひら

き、(右手に)日輪を持っている。D本では胸前で掌を前にし第二・三指を捻じて開蓮華の茎をもっている。日輪を持っているのは左手である。C本の左手は腰に覆せるようにあて天衣をつけて三白馬に乗る。(また五白馬の場合もある)。しかし別のB本では五鵝に乗る。D本の頭上は竜頭を中央に配置し左に馬頭、右に鳥をおく。B本に限って述べれば乗座の描写に關しては月曜と誤って解釈された可能性がある。D本の全容は女神像で襦褌衣である。

(2)月曜像はC本ではSomaで暮太陰・月精の意。右肘を曲げて掌を仰いで半月上の兔を持っている。D本では日曜像とほぼ同形の女神像であるが、右手に月輪、左手に茎の無い開蓮花を掌にのせている。ただし頭上は馬頭を中央に、左に竜と右に鳥を配置しているのが日曜とは異なる。A本とは入れかわって鵝鳥の上に乗る。

(3)火曜像はD本に特徴がある。炎髪三眼の忿怒相で、身体は恐ろしい赤色であらわす。頭上は驢冠で全身に甲冑をつけた二眼四臂の護法神形の立像である。D本でも別本のサンフランシスコの個人蔵のE本一卷(二八・六×八四五・八センチ)では、火曜像の圖像は同じであるが、D本が円相の中に描写されている点が異なる。いずれも上半身を裸形にして条帛をつけ、類例の少ない唐代西域風の甲冑を着る。とくにD本では唐本をこの一図で代表するような圖像である。冑と肩甲の

細部の描法をよく見ると鱗状札で、下半身は甲が短形状札で裾は長く足首までである。この冑のシンボルの描写として『四種護摩本尊及眷属圖像』に登場する圖像そのものが類似する。そして東密に伝えられている護摩壇の炉形(壇様)の多くがこれに近似している。すなわち剣を持った菩薩形の半跏像がそれである。

(4)水曜像は、D本によると圖像右下に「天竺名部陀」とあるからブダア(Budā)である。なるほどD本の女神立像のもつとも特徴ある容姿は、右に筆、左手に紙を持って何かを記録しようとしている。これには何か意味があるのだろう。インド神話では月神ソーマが聖者プリハスパティの妻ターラーをうばって、神々の戦いとなった。ところが間もなくそれはおさまってターラーは夫のもとにもどった。しかしここで問題が起った。ターラーが生んだ子がソーマを父とするのか、プリハスパティを父とするのか、悶着がたえない。しかたなく梵天ブラフマーがターラーを問いつめたところ父がソーマであることを認めたとという。そこでブダア(賢いもの)と名をつけられた。水曜星の圖像は恐らくターラーが問いつめられたときの証の姿であろうと考えられる。両手の筆と紙はわが子を認知するための記録のシンボルではなからうか。D本右上の「辰星」とは黒身(syamang)を漢訳したもので、仏典に出る黒星と同じか。頭上は猿冠、なおD本には水

曜像の奥図というものがあり、『七曜攘災決』には「形如黒蛇、有四足」とあり、ここでも「黒い」色を標記している点に注意すべきであろう。しかも四足とあるのは竜とまったく同形で、黒い竜は天にやがて黒い雲もよび起すに違いない。したがって水曜像は「黒い」というイメージに左右されるアキシオンをモチーフとしてインド神話の伝承から借用している彩色(黒)がD本の特徴である。むろん伝承の素材となっているインド神話の図様はきわめて古い。

(5)木曜像はD本では一見して老人形の立像をあらわす。左手には蓮花を盛った皿をもち、右手は五指を上方にのばして目の前のものを静止するしぐさを胸前にて示す。なぜ老人に表現したかは謎であるが、B本では老人形をとっているものは土曜星であるから基本的にはD本とは伝承が異なる。インド神話ではD本の漢音にもみられるように「勿哩訶跋底」すなわちブリハस्पティ(Bṛhaspati)に該当する。これはリシ(Rishi)仙の一人であるといわれ、常に人間と神々の世界を仲介して「輝けるもの」(Diva)という。しかし後世の宋元風のそれは帝王像として描かれることがあり、唐代のインド神話を介在させた図像化はみられなくなる。木曜像にみられるようなこころした図像の変容は、必ずしも描法や表現のありかたの変化が要因ではない。インドから伝えられた梵暦の影響、あるいはインドの暦法にも一部分しか登場しないような

十二宮や七曜の天文学上のありかたなどを見極めながら結論を出す必要がある。しかし唐代の密教の隆盛にともなって二十八宿と七曜は両者の位置と力関係・運行のシステムなどを解明しながら占星術の用具として数多くつくられていった。不空訳の『宿曜経』二巻や一行自ずからの撰述になる『七曜星辰別行法』や『梵天火羅九曜』が成立した背景には、この木曜像が変化する状況の影響がとうぜんあったに相違ない。さらに七曜に関するものとして「西天竺婆羅門僧金俱吒」に

よる『七曜攘災決』あるいは金剛智の『北斗七星念誦儀軌経』などの著作が知られる。この中で『七曜攘災決』は、とくに『九曜秘曆』を構成するのに際して重要な役割を果たすと伝える。柳沢孝女史も示唆していることであるが、敬宝書写本(東寺)によると、まず功德を説き、そのあとに九曜の形像をかかげる。日曜に始まり、月・火・水・木・金・土・羅喉・計都の順に配置されて、七曜についてはその図像のあとに各曜直日の吉凶に関する記述があり知ることができるとして最後の計都星の図像に続いて、前の形像とは違う姿の七曜すなわち日・月・木・火・土・金の順に描いている。なお九曜は真言・天台をとわず、使用対象となつたらしく台密の青蓮院吉水蔵にも伝来した「九曜秘曆」はその代表的図像である。吉水蔵のそれは現在にはサンフランシスコの個人蔵であるが卷子本で天慶三年(九四〇)の書写本を天治二年(一一二

五)に宗観が伝写したものである。宝浄房宗観は天台座主賢暹（天永三年「一一二二」八十四才歿）の弟子である。この天台系統の一本は東寺の観智院に伝来したD本、現在スペインサ・コレクシヨンと双壁をなすほど貴重なものである。

(6)金曜像はD本によると琵琶を右手でひく女神立像である。

B本では「戎羯羅」と伝えるからシユカラ (Sakara) で、ヴェーダではシユカラという行僧が修行をつんでいると、ヴィシヌのために片目を刺されてしまう。この片目になることと金星の光りと何らかの関係があるのではないか、という発想も生じようが今だに明確な解答がない。しかもD本は明らかに女神である。ただし金星はもとより太白星で「十六の光りを放つ」(Shodasasu)ものという意味をもち、あるいは「白色のもの」(sweta)とよばれていたのでイメージとしてはD本の白描を成り立たせる素型がここにある。かろうじて『攘災決』では天女の形をしているので、手に結印し、白鷄に騎乗するという姿の一部が一致する。この金曜像をみるまでもなく中国の密教圖像は、インド神話から忠実に伝承され復原的に圖像化されたものと、中国独自に解釈されて作成されたもの、さらには道教のオリジナルな創作も伝えられており一定していない。とくに、そうした道教との係りについては、道教美術史上の星宿として独自の発展を可能にせしむる要素もあった。例えば大阪市立美術館所蔵の『五星及二十八宿神

形図』は「奉義郎守竜州別駕集賢院待制仍太臣梁合瓚上」と題簽に認められるという珍しい図巻である。そのうち金曜像に該当する部分は、「第四の太白星神はもつとも優麗である。太白は后妃なり、とあるように強い表情の白面の女神で、大きな鳳冠をかぶり、左手を胸に、右腕は水平に曲げて掌を直立し、黄衣が風になびき、乗っている巨な鳳凰はときかを立て、カギ形のくちばしを尖らせ、翼を張り長い尾羽を後方にひらめかせ、両脚をそるえ宙を蹴っている。僧繇の筆の運動感をもつともよくあらわした例であろう。太白星につきものが琵琶は持っていないが、祭るに女樂を用う、とあるのがそれを思わせる。」と野尻抱影氏は述べる。この『五星及二十八宿神形図』は絹本著色でたて三六・〇センチ、長さ四九〇センチのもので宋元諸家も官印をたらねている。梁の僧繇が竜を描いて瞳を点ずると雷鳴が起ると会得したもので、北宋時代に道教を狂信した徽宗帝が愛蔵したとも伝えられている。したがって金曜像についてはこの図巻との関係も考える必要がある。

(7)土曜像はC本では裸体の老人形、D本とはほぼ一致し九曜中もつとも有名な圖像である。火曜・羅睺・計都とともにこの世に災害をもたらす四悪星である。この(7)については、土曜星としての成立に独自の事情があることは、既に述べたのでここではふれない。

(8) 羅睺もC本・D本ともに図像が一致するがD本では各頭髮間に一蛇をつけるのをこれ(8)とし、三蛇をつけるのを(9)計都としてゐる。以上、梵天火羅九曜について図像をみてきたが、一行の解釈が一部分みられ側面的には道教の影響もいちじるしいことがわかる。また敦煌の繪曆との関連性も考慮し、さらに西方との文化交流も問題意識として定める必要がある。しかし源流の大部分はインド神話を根拠に成立していることがわかる。(昭和56年度総合研究(A)「仏教とヒンドゥーイズムの理論及び実践形態の比較研究」の研究成果の一部)。

- 1 B本の奥書の原本によれば、長谷寺の歓喜院快道の記録において文治五年(一一八九)八月に書写したものに校合本があったことを伝えている。そしてこれは「桐尾本写之」(大正蔵、第二十一卷、四六二C)と伝えるが、この桐尾本は高山寺に現存する玄証自筆の図像入り原本を指すに違いない。
- 2 神林隆淨氏は後世の偽作とみる。(『仏書解説大辞典』第一〇卷、一六四頁)。
- 3 この『九曜秘曆』は統一八・七×横一五・七センチで粘葉装冊子本。書写年代は十二世前半になる貴重な別本である。東寺観智院旧蔵で現在はニューヨーク市立図書館スペンサー・コレクション所蔵。
- 4 中野玄三「観智院所蔵九曜秘曆について」(『ミュージアム』二二八号、一三〇～二四頁)。
- 5 柳沢孝「九曜秘曆」(『在外秘宝』解説、五〇頁)。
- 6 堀岡智明「九曜秘曆」(『在外秘宝』解説、四九頁)。
- 7 野尻抱影「星と東方美術」一三六一～七頁。
- 8 拙稿「星宿美術―星曼荼羅―」(『古美術』第三五号、三八頁)。(神奈川県立金沢文庫主任学芸員)

火羅図の図像と成立(真 鍋)

新刊紹介

西義雄博士頌寿記念論集
「菩薩思想」

A5判・本文六六二頁・定価一三〇〇〇円
大東出版社・昭和五十六年五月十一日刊